

[要旨]

## 「キャリコ裂き」の成立

——18世紀初頭ロンドンの騒擾をめぐるステレオタイプの用法について——

萩田 翔太郎

1719年6月10日、ロンドンの東の郊外、スピタルフィールズで騒擾が発生した。絹織物を製造していた織布工が、街頭でキャリコのガウンを着ている女性を見つけると、それを後ろから切り裂いたのだ。こうした事件は少なくとも1720年までは頻発し、一般に「キャリコ裂き (calico-tearing)」と呼ばれていた。これまで歴史家は、事件を17世紀から続く東インド貿易をめぐる論争の一場面として理解してきた。特に、キャリコのガウンを裂くという形式に注目し、国内産業を擁護する言説がジェンダー化された暴力へと発展した例として論じた。

本稿の目的は、当時の報道と論説がどのように事件を描いたのかを分析し、同時代の観察者にとって織布工の暴力がもった意味を再構築することである。特に注目するのは、織布工がキャリコを裂く所ではなく、街頭での集団行動や治安部隊との戦闘場面を描く報道である。キャリコを問題の中心に置かないこうした描写が、当時どのような効果を発揮したのかを考えるのである。

この目的のため、本稿はスピタルフィールズという土地が帯びていた無秩序のイメージ、17世紀半ばから続く党派対立におけるステレオタイプの応酬、そして1710年代の戦争報道をめぐる論争の3つの文脈を参照する。これらの文脈に照らして、「スピタルフィールズの織布工」を「ぜいたくな女性」と対になるある種のステレオタイプと捉える。暴力を振るう織布工は、キャリコの危険性を読者に訴える目的に適う限りで言及に値したのだ。その一方で、キャリコを裂く場面ではなく集団行動や戦闘行為に注目する報道は、こうした女性蔑視のレトリックとは別の役割を騒擾に与える。特に、同じ紙面の戦争報道と並べて読まれることで、織布工の暴力は当時のヨーロッパで起きていた戦争と重なり、1688年以来戦争に関与し続ける政府を批判する視座を開くことにもなったのだ。